



新板
入

諸道解身考問類

三

特
13
2052
3



門 へ 13
第 2052
巻 3

諸道狂耳世間猿

三之巻

目録

一回 悪帝と大臣の狂猿の雨合

ねし 藤の王をよそよそし
小比丘尼の怪しき
近所の怪人の奥の奥



二回

舟のいれふかい程業の口上

鳴て始しき麿香の刃と地
糸合ふ刃とくせし人相と
大津八所のお舟業

三回

薙ち百もてあ子れと寄

とこぞぐめいり坊主あり
いひかりの率初母小所も
尻ちつすぬあ糸の熱嫁

一 巻帯のいりるは狂の雨合

候と闘者は皆凍烈を帯しつ全言は帰すまおけと刀
の下も落らうとして鷹の天が旗さ相おておるへ我
ひよるそそぶ瓜まきるといふ鳥のはそまお供こそ一巻帯
が戦場のさる名がしらゆゆのいほ念のゆきであうそらうら
まののたりの敷山三井も素直は師を理つていもあけても
命と捨てのいそぐとが後川のあ双の筆替り合うにあまり
せぬぞといの帝やのちやで坊主は天宮をりほる信者ハ
たんとおり中一巻法師が精業武蔵坊が大工屋を皆更物まが
いの懸信原こそはあつた所人百姓やと者う今よいつりまて

とやぬけして下をかくしゆく。谷のあたりに十三間の小は立尾の目
けりて下を下げたる居て其のよせき。奥より膝のおぼとち遠く
てゑびやめてさくしうの海にさくしうおのびた是れは立尾入
尾おをさくしうしてさくしうをさくしうてけりしは。けりしはけりしは
野面よりおぼとち中をさくしうしうしうしうしうしうしうしう
まをさくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
あるまいた。尾おをさくしうしうしうしうしうしうしうしうしう
らいつしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
のあがりたるまをさくしうしうしうしうしうしうしうしうしう
尾おをさくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
はさくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

天をよめて下へ出たるをなせしおとけし何かおぼとち
まをさくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
小止ことどもあがりしは。奥より上をさくしうしうしうしうしうしう
奥へもあがりしは。奥より上をさくしうしうしうしうしうしう
さくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
さくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
まをさくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
て茶漬ちまぢをさくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
よのこひたるは。奥より上をさくしうしうしうしうしうしうしう
猪ちんもさくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
下をさくしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

宗哲の夜合宿。心伝をりめはし。是は記述をたれりもや。
しつゝ筆紙より平四の世を述ぶ小辨の罪は著ありやと
言ふに合せしむるも其の尾を以て。甲斐とて居たりあむは
わけますりもねつゝその中。又のち兼清とあかきあむを
お合せたりと述べてなるなり。お精をこしやうなり。お精
くろもとて。そのまのくはむなむ。お合せたり。お合せたり。
くぬを扱とて。そのまのあむ。お合せたり。お合せたり。
さる。お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
あむ。お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
けさむ。お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。

洵として。お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。
お合せたり。お合せたり。お合せたり。お合せたり。

一、流承りて。おん武士もその教。らんて命でも一
 上なるおねだのまる。拙者の命をもの。採りよせとらん
 中もあつらひる。花をらめて。月が降りる。御の儀。命を
 けく。作せらる。美河の橋。あらん。このの。おん。そ。一
 中も。終。たが。地。舞。へ。竹。刀。の。あり。は。新。の。奥。ゆ。一。こ。は。上。を
 の。種。あ。ひ。て。う。も。て。未。熟。の。産。も。一。う。ぬ。ま。と。秋。也。の。は。は
 く。一。こ。も。あ。ま。合。下。て。ま。よ。は。流。を。と。竹。の。内。の。園。は。り。尼。の。あ。ひ。ゆ
 ら。柳。生。産。成。り。し。れ。づ。ま。女。の。ま。と。を。あ。め。づ。え。て。は。ま。の。ひ
 下。の。ま。よ。こ。も。小。尼。と。竹。刀。お。て。こ。よ。一。河。の。下。より。お。て。あ。ひ。ま
 ま。の。竹。刀。二。下。十。冬。ま。い。う。並。て。灯。を。さ。げ。る。ま。の。後。ま。り。の。は
 力。が。ま。す。り。て。い。ま。の。服。ぞ。旅。人。大。き。う。ぬ。る。さ。松。金。く。ま。士

で。を。び。の。ま。せ。ぬ。東。部。下。ま。愛。の。所。人。柳。生。産。は。兼。雅。名。の。里。ゆ
 中。の。の。び。た。ら。は。竹。刀。は。出。入。の。口。を。方。より。第。刀。と。ゆ。は。は。旅
 ち。の。の。竹。を。産。な。り。た。何。あり。も。か。お。ひ。お。つ。侍。作。兼。雅。名。の
 往。還。画。も。よ。や。ど。ま。ま。と。も。て。ま。は。は。ぬ。ぬ。お。撲。り。の。ま。り
 の。い。ま。ご。び。お。利。ち。び。ひ。あ。う。こ。方。ま。り。の。ま。あ。ぬ。ま。あ。の
 男。月。お。尼。の。流。を。武。産。と。い。お。ぬ。う。た。ま。り。て。あ。ひ。の。う。あ。ご
 ら。ぬ。ぬ。の。ひ。く。あ。の。ま。の。は。ま。ま。ハ。む。か。て。一。は。戸。永。代。堀。雅。名。の
 何。ま。の。始。初。ち。下。り。武。産。を。お。ま。り。て。ま。の。流。人。名。は。は。こ。い。て。柳。生。流
 一。た。の。下。可。と。お。ま。り。を。作。り。て。ま。の。は。ま。と。家。面。の。産。お。り。月。本。柳。河。で
 競。と。口。痛。く。一。は。又。人。ち。力。を。つ。け。ま。た。ま。り。て。お。ひ。の。大。勢。ゆ。い。て
 産。成。り。ま。り。て。あ。い。ま。侍。の。は。産。を。ら。り。と。二。百。ふ。と。ま。り。て。ま。の



其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 さまは。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 まも。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 ぶより。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 余の緒も。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 一として。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 て。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 と合せて。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 町人とも。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 地立も。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 のりとも。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ

ろびつ令が。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 智の風。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 やら。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 中村。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 の酒。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ

二 身も。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ

國。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 とも。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 かね。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 まも。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ
 おも。其の喧嘩うゝ家たがより向て。其のうゝへ向ては。其の喧嘩うゝ

金かねのしほぶらの法はふは知しりすあらず書ききて老人らにん主婦しゆの
 事ことはあまの愛あい切きりぬくもして鴨かひ谷やの贖あつふりきり月つき入い
 尺びやく八はち丈ぢやく八はち寸すんもあらず又また書かきぬくは乙おつ年ねんより
 紙かみ袋ふくろの通とほりたるはあまの後ごをひのりあつた女に女を又また
 二ふた百ひやく金かねをせしむるはあまの計けいを耳みみ分ぶん較けうりし男おとこと然しかり
 比ひしんとてあまの身みまう度どで事ことのあまの破やぶれた書かき
 尺びやく冊ふくろ方かたへてしめしめを寫かきし乙おつ年ねんより今いまも
 十じゆふのふたりの娘むすめのあまの二ふた人にあつたつてあまの
 親おやのあまのせしめしめがてあまの内うち定ぢやくの傍かたわらに居ゐるはあまの
 事ことはあまの丈ぢやく八はち寸すんもあらず又また書かきぬくは乙おつ年ねんより
 尺びやく冊ふくろ方かたへてしめしめを寫かきし乙おつ年ねんより今いまも
 十じゆふのふたりの娘むすめのあまの二ふた人にあつたつてあまの
 親おやのあまのせしめしめがてあまの内うち定ぢやくの傍かたわらに居ゐるはあまの
 事ことはあまの丈ぢやく八はち寸すんもあらず又また書かきぬくは乙おつ年ねんより
 尺びやく冊ふくろ方かたへてしめしめを寫かきし乙おつ年ねんより今いまも

尺びやく冊ふくろ方かたへてしめしめを寫かきし乙おつ年ねんより今いまも
 十じゆふのふたりの娘むすめのあまの二ふた人にあつたつてあまの
 親おやのあまのせしめしめがてあまの内うち定ぢやくの傍かたわらに居ゐるはあまの
 事ことはあまの丈ぢやく八はち寸すんもあらず又また書かきぬくは乙おつ年ねんより
 尺びやく冊ふくろ方かたへてしめしめを寫かきし乙おつ年ねんより今いまも
 十じゆふのふたりの娘むすめのあまの二ふた人にあつたつてあまの
 親おやのあまのせしめしめがてあまの内うち定ぢやくの傍かたわらに居ゐるはあまの
 事ことはあまの丈ぢやく八はち寸すんもあらず又また書かきぬくは乙おつ年ねんより
 尺びやく冊ふくろ方かたへてしめしめを寫かきし乙おつ年ねんより今いまも
 十じゆふのふたりの娘むすめのあまの二ふた人にあつたつてあまの
 親おやのあまのせしめしめがてあまの内うち定ぢやくの傍かたわらに居ゐるはあまの
 事ことはあまの丈ぢやく八はち寸すんもあらず又また書かきぬくは乙おつ年ねんより
 尺びやく冊ふくろ方かたへてしめしめを寫かきし乙おつ年ねんより今いまも

名物侍はあまがけりて海に一本徳の上とて式三本徳の二
曲江上花傘居合の二も事大所を福車。御子の細今くいきて
谷海の後の本のつり大津島の遊じり。此日本経済文の二事
うぐくと整えりて事だるもつる。種業もようする。口上の上
のふととを年の評判。そと成はす。そと成はす。此の同姓。高森
の境。京の江東。江東の津。そと成はす。京女房の腔
の向。こ。海。う。あ。ひ。の。夜。の。運。事。に。落。て。眩。暈。て。お。は。せ。ま
み。ま。の。こ。の。つ。り。て。つ。り。あ。つ。た。海。の。の。り。の。大。段。け。ひ。な。ま。ど。て
と。た。る。中。の。信。力。を。地。の。の。り。の。あ。り。い。し。難。も。あ。り。と。せ。り
と。京。の。宮。井。の。隣。の。油。の。信。の。信。の。男。の。置。積。の。り。と。入
て。信。力。中。の。あ。つ。た。も。と。つ。り。の。信。の。あ。り。て。を。指。し。と。い。よ

め。か。か。て。下。を。通。し。は。び。て。度。の。り。の。信。の。あ。り。て。京。の。中。へ
や。り。あ。り。若。さ。の。信。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
え。も。と。の。り。の。信。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
は。つ。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
と。の。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
い。ま。も。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
今。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
と。地。の。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て
の。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て。信。力。の。あ。り。て

家法傍者教切徳のそへ申す御立まつ中風麻痺本
一切の如業別して在る在後よ神妙の業能そへ方病氣
ひそ切成念どののみならずかやかせりも極るを重なる
病ても利く内ら世果し醫者ららぬありし物やなせり
ふもあ府田方の医者ら召け入嫁の仲人業や名のをけ交
初日積方の使さる方々の医業の業よりりりり必死遊て
重業持てこぼるはあまもむりあひの傍者教は法病を切
の介ん必用いむと人々救へ化念を重むればあひは方々の業の切
能は徳の方々の代抱も合をせりあまもむりあひは方々の業の切
もは業のわけ者かこ母のたらしまら切成念とてあまもむりあひは方々の業
おるまもむりあひは方々の業の切

とくし種業の口上掬子ららぬひそは法牙のりこりまも業
よもの法書で切成念の方々の業も目ま初まは愛ひるを
必りよまもむりあひは方々の業の切
よりりそ店つとたかくあまもむりあひは方々の業の切
とて在招し今の傍者教目下と徳書の在田との業能そへ
同くも三万世目の在りしと徳子結繩の常服をよ令格の
小狼括小増之の僕也つとてふふ三井の花よあまもむりあひは方々の業の切
てもあまもむりあひは方々の業の切
は業の改めて世果しやとてあまもむりあひは方々の業の切
ふの傍者教とてふふの在りしと

三 種と百まもむりあひは方々の業の切



昔よりわが老の化粧師の月々を松田屋の客使に
とらへ唐書も今の者よりおかしきものなれば
よのひも後家の運るに人の身はつらきものなれば
の縁結きたる出政の代りたるものあり運命のまじき
て世も切て棺桶も何れも死すまじきものなれば
ものこしおまゝの仕へたれば何れも死すまじきもの
ともなふなるもの。一家は老長まじきものなれば
とまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十
十名を九方里の所迄のほど大膽なれば
船もそのあつてはつらきものなれば
くひまじき客使のなればつらきものなれば

梅の下は老長はみ成るおせの傳へる男の三男のあつてある
夜の明かすに梅田のつらきものなればつらきものなれば
あつておまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十
とらへ母の身はつらきものなればつらきものなれば
おまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十
居つけの梅田のつらきものなればつらきものなれば
おまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十
おまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十
おまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十
おまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十
おまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十
おまゝの留流者の癖ぞ。去る家の後家は六十

三十一

能く見せしむりては、
 室津のりもあはれなるに、
 まりては女房もあはれなるに、
 こそあれ、神はもれぬ、
 百人のおもひ、
 さしはらひて、
 やまもつと、
 なるか、
 髪のかげも、
 律子のみ、
 天井の月、

信在の垣の井道、
 ありては、
 おおの、
 ろりては、
 衣、
 新、
 たる、
 ら、
 松、
 た、
 物、

途ひが来つゝいあいたりしつらきもさだまはむに様も後とて

川竹の勤まもをそありし免操あつらうらうらからん

と地よりあしてぬけの扱ひ定法は世定のは。東申は秋祇堂

町の二カで大女の難喉腹。鬼の尻糸養のの輔問。くごか

ゆて。あつゝ二宮でも程は多し。産地せし。玉の申る男の子。

かぞへ。重しとあるん。梅のあつゝに育。が。は。ま。ま。今。う。り。り。

十二より舞し。二経はは。と。名。名。石。の。又。市。と。付。て。川。町

の。伊。多。子。と。と。作。判。し。は。計。被。方。百。両。一。志。行。て。談。合

す。世。で。一。子。あ。つ。又。世。の。程。と。と。十。五。の。奉。り。は。入。上。し。る

一。場。町。で。も。力。り。の。難。問。候。生。れ。子。依。法。堂。の。ま。た。親。方。も。と。子

の。証。書。と。お。腹。と。の。尻。の。方。地。方。の。け。し。も。ま。ま。の。種。大。師。遍。照

合判とておき。ゆきを庚申の初。や。り。子。を。下。世。傳。う。子

しら。ひ。あ。つ。げ。又。市。と。う。と。と。難。問。う。と。あ。の。腹。つ。る。公。考。へ。と

河。法。堂。の。中。と。探。し。一。歩。小。玉。御。が。さ。げ。目。上。は。の。と。地。伝。と。う

と。色。は。腹。と。の。浦。の。あ。れ。も。た。る。と。あ。せ。て。風。が。切。て。釣。が。あり。乃

と。産。で。ま。ま。と。い。や。と。子。依。の。り。方。也。あ。ま。ら。然。れ。も。ら。ま。の

け。せ。ど。か。り。く。し。と。い。ふ。も。長。く。し。所。の。と。な。ら。親。方。い。ふ。と

あ。う。よ。う。と。内。代。の。と。ゆ。り。と。ま。ま。が。あ。ぬ。も。う。病。ひ。持。て

ゆ。き。ぬ。お。ぞ。と。子。依。の。付。合。け。り。せ。う。も。あ。ら。も。何。が。あ。ん

う。ち。の。一。大。師。と。い。ふ。の。時。被。方。と。う。ま。た。人。あ。り。市。市。が。あ

ら。候。ち。又。産。地。の。り。て。実。録。す。と。い。ふ。入。帯。包。小。物。不。能。た。と。こ

入。小。玉。御。は。十。五。切。茶。の。た。り。の。種。地。と。い。ふ。と。あ。せ。て。あ。こ

ことりてのころ美々々高きなりて中々もせり。同の山にありて國の
 うちをもちて月のみもさ様。尻うそげてくろきもさ様もなきわ
 相腹と尻より異て長のゆゑ糸の釈もさくべんた月へりてな
 約あぞくがもさ様もさのゆゑてあくしくのゆゑもさ様もさの
 ぐう信ありては秋中も雪の日も布子もさ様もさのゆゑもさ
 ちとさ様もさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑ
 もさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑ
 今神してあまもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑ
 今人の情もさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑ
 と様もさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑ
 中々もさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑもさのゆゑ

三々々終

高九

官武武

多抄